

宮沢賢治の童話の特質について

アミーラ サイド アリー ユーセフ

はじめに

宮沢賢治が童話を書き始めたのは1918年〈大正7〉年8月であった^①。その際、賢治は盛岡高等農林学校で研究生として学んでいた。ところが、宮沢賢治が初めて書いた童話を家族に読んで聞かせたことを、弟清六氏は追想しながら、次の様に話している。

《この夏に兄から童話『蜘蛛となめくちと狸』や『双子の星』などを読んで聞かせられたことを、その口調まではっきりおぼえています。生まれてはじめて書いた童話を、まっさきに私ども家族たちに読んで聞かせた得意さはどんなでしょう。赤黒く陽に焼けて、これからの人生にどんなすばらしい仕事が待っているかを予期するように目をきらきら輝かしていたこの頃の兄を思い出すことはじつに楽しいことです。

先に挙げた、賢治の弟清六の言葉が物語っていると思われる。果たして、弟清六に兄の素晴らしい将来を期待させたのは何であろうか。実際に、筆者はこの言葉を本稿の鍵語として手掛かりにしながら、以下の質問に焦点を当てたい。一体、宮沢賢治の童話の特異性は何であろうか。又、賢治が童話を書き始めた出発点は何だろうか。さて、宮沢賢治の童話執筆の出発点から考察したい。

I. 宮沢賢治の童話執筆の出発点

前述のごとくが、賢治が初めて童話を書いたのは1918年8月であった。この日付に先ず、着目したい。同年の7月、鈴木三重吉は『赤い鳥』^②を創刊し、以下の標榜語を書いた。

○現在世間に流行してゐる子供の讀物の最も多くは、その俗悪な表紙が多面的に象徴してゐる如く、種々の意味に於て、いかにも下劣極まるものである。こんなものが子供の眞純を侵害しつゝあるといふことは、単に思考するだけでも怖ろしい。

○西洋人と違つて、われく日本人は、哀れにも殆未だ嘗て、子供のために純麗な讀み物を授ける、眞の藝術家の存在を誇り得た例がない。

○「赤い鳥」は世俗的な下卑た子供の讀みものを排除して、子供の純性を保全開發するために現代第一流の藝術家の眞摯なる努力を集め、兼て、若き子供のための作家の出現を迎える、一大區劃的運動の先驅である。

○「赤い鳥」は、只單に、話材の純漬を誇らんとするのみならず、全誌面の表現そのものに於て、子供の文章の手本を授けんとする。

○今の子供の作文を見よ。少なくとも子供の作文の選擇さるゝ標準を見よ。子供も大人も、甚だしく、現今の下等なる新聞雑誌記事の表現に毒されてゐる。「赤い鳥」誌上鈴木三重吉選出の「募集作文」は、すべての子供と、子供の教養を引受けてゐる人々と、その他のすべての國民とにむかつて、眞個の作文の活例を教へる機關である。

ところで、1924年に発行され、1925年に『赤い鳥』に載った、宮沢賢治が生前に出版出来た唯一の『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』の「序」に賢治は自身の童話について以下のように述べている。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐもたないでも、きれいにすきとほつた風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびらうど羅紗や、寶石いりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見ました。

わたくしは、さうふきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鐵道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。

ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな氣がしてしかたないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたまでです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでせうし、ただそれつきりのところもあるでせうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんおことだか、わけのわからないところもあるでせうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾くきれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたうのたべものになることを、どんなにねがふかわかりません。

(下線筆者)

大正十二年十二月十日

宮澤 賢治

しかも、宮沢賢治は『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』の「新刊案内」の中に、次の通り続けて書いている。

(初略) この童話集の一列は質に作者の心象スケッチの一部である。それは少年少女期の終わり頃から、アドレッセンス中葉に対する一つの

文學としての形式をとつてゐる。

この見地からその特長を数へるならば次の諸点に帰する。

- 一、これは正しいものの種子を有るし、その美しい發芽を待つものである。而も決して既成の疲れた宗教や、道徳を色あせた仮面によつて純真な心意の所有者たちに欺き与へんとするものではない。
- 二、これらは新しい、より好い世界の構成材料を提供しやうとはする。けれどもそれは全く、作者に未知な絶えざる驚異に値する世界自身發展であつて決して畸形に涅捏ねあげられた煤色のユートピアではない。
- 三、これは決して偽でも仮空でも窃盜でもない。多少の再度の内省と分析とはあつても、たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものである。故にそれは、どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て萬人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である。
- 四、これは、田園の新鮮な産物である。われらは田園の風と光との中からつややかな果實や、青い蔬野菜と一緒にこれらの心象スケッチを世間に提供するものである。(下線筆者)

これらの文章から言えるのは、宮沢賢治は鈴木三重吉の文章による働きかけに応え、童話を書き始めたことなのではないであろうか。

ところが、上述した、宮沢賢治の自身の童話に関する解釈の中から二つの言葉の意味を深く考察したい。先ず、(卑怯)である。「卑怯」の語釈に関しては、「気が弱く意気地がないこと。弱々しいこと。また、そのさま (下線筆者)⁽³⁾」「勇気のないこと。物事をするにあたって正々堂々としないこと。⁽⁴⁾」、「心が弱く物事に恐れること。臆病。⁽⁵⁾」、「物事に正面から取り組もうとしないこと」⁽⁶⁾」等と定義されている。この通りの定義を考えれば、童話やその理解等とは関係がない気がするのだが、まぎれ

もない。但し、ある側面から深く考えてみると、これらはいずれも（やろうとしない）という意味も含まれているという点なのではないか。この意味を宮沢賢治の先の言葉の内容に沿って述べてみたら、やはり、「分かろうとしない」と言い換えても構わないのであろう。次に、(成人)という言葉を取り上げる。成人の定義（大辞林の語釈）は《心身ともに成長して、一人前の人間になること。また、その人。》と《成年に達すること。また、その人。現代日本では満二〇歳以上の男女という》である。さらに、(新明解国語辞典の語釈)《[法律上の権利・義務などの観点から見て]社会の一員とされる大人（となること）。[社会通念・少年法では、満二十歳以上を指す]》。(傍線筆者)又、《十八歳以上の称》である。

このように、宮沢賢治の童話は「子供」向けだけの作品ならば、彼の童話の案内文には童話とは一切関わっていないとされる「成人」だという言葉が出てくる筈も意味もないと思われる可能性がある。然し、賢治による見解の言葉を改めて深く考察してみると、この童話を通じ、(子供)は勿論、(大人)にも分かって欲しいことが書いてあると解釈したら言い過ぎなのではないか。何故なら、宮沢賢治は生前に出版出来た唯一の童話刊行の「案内文」にむやみに言葉を書く訳が無い筈だと思う限りで、とりわけ(成人)あるいは(大人)を指摘する言葉を書こうという発想が根底にあったことも考えられる。兼ねて、「卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である」の裏を返せば、「卑怯ではない成人たちに畢竟理解可能である」という表現に成り得ると思考される。即ち、賢治の自分の童話に対する解釈を、筆者なりに簡単に言い換えると、次のごとくなるのであろう。「自分が書いた童話は一般読者に共通するが、分かろうとしたくない(大人)だけが結局理解出来ない」。

ここにおいて、宮沢賢治は「大人」に伝えたいメッセージがあるならば、どうして従来の「小説」ではなく、「童話」を通じて伝えようとしたのであろうか、という疑問を検討しなければならないと思う。この問題

を千葉一幹の意見から試みたい。

(初略) 童話を選んだこと、逆に言えば、小説を選ばなかったことの意味は、その表現内容だけの問題ではない。それは、小説というジャンルが近代日本社会における位置との関係でも考察される。賢治は、まとまった形で小説を書くことはなかったものの、しかし、小説を書くことを最初から否定していたわけではなかった。⁷⁾

要するに、最初から賢治は小説の著述を避けようとしなかったと言えるのであろう。換言すれば、宮沢賢治は小説を書こうと考えたが漸く書くことが出来なかった理由があると言えるのではないであろうか。この理由は以下の通り明確したい。

まず、小説のテーマとしての「恋愛」と「性」である。実際に、当時の近代文学の主流は、恋愛や性を小説のテーマにすることであった。それのみならず、恋愛・性以外のテーマは当時の小説にはほぼ進められなかった。一方、賢治は自分自身の思想や生活経験に即し、このごときテーマについて書くことを捨象していたと考えられる。このことは、次の千葉一幹の発言から判明になるのではないか。

恋愛をそのもっとも重要なテーマとした近代小説を賢治が書かなかったのは、それが彼の思想の核心部に触れる問題であったからだ。恋愛の価値を説き、それを称揚するような小説は、彼の思想からして、そしてまた最愛の妹トシの最後の願いからしても、書くことの出来ないものであったのだ。⁸⁾

次に、親不孝不可能である。日本では、明治時代に入る前に、子供は、祖先は勿論、とりわけ親の跡を引き継ぐことは普通の基盤であり、守ら

なければならぬ人生態度であった。但し、明治時代になってから子は自分の両親より偉くなることを目指すよう、その跡や職業を否定したり、違った人生を計画したりすること等が、当時の主流に至るまで認められるようになってきた。明治以来大正時代にかけて、このごとき意識の痕跡は当時の文学特に小説に明らかに登場してきた。一方、賢治は自分の生まれ育った環境からそのような主流が親に対する反抗や不孝だと見做し、一生両親に非常に大事にされた彼にとっては受容される訳がなかった。

親を否定し、超克することを目指して書かれた近代小説が生み出されるエネルギーそのものが、賢治においては希薄であったと考えられるのだ。そこに賢治が、小説執筆に向かわなかったもう一つの要因があったのだ。⁽⁹⁾

それから、立身出世主義である。実に、近代小説家らは明治時代に流行した親から外れて独立するという意識をもって近代知識人としての立身出世を成し遂げようとしたということを拒むことには無理があるのではないかと考える。因みに、それを馴染めなかった賢治にとっては、名声や社会地位獲得等を目指す、そのような欲望的な小説作業は認められなかった。これは、大正10年7月13日に宮沢賢治が関徳弥に宛てた手紙の一部から確認される。⁽¹⁰⁾

図書館へ行って見ると毎日百人位の人が「小説の作り方」或いは「創作への道」といふような本を借りやうとしてゐます。なるほど書くだけなら小説ぐらゐ雑作ないものはありませんならぬ。うまく行けば鳥田清次郎氏のやうに七万円位忽ちもうかる、天才の名はあがる。どうです。私がどんな顔をしてこの中で原稿を書いたり綴ちたりしてゐるとお思ひですか。どんな顔もして居りません。(中略)いくら字を並べても心にないものはてんで音の工合からちがふ。頭が痛くなる。同じ

痛くなるにしても無用に痛くなる。

このごとく、宮沢賢治が小説を書けなかった所似は前述の三点にあると思う。ここで、改めて千葉氏の発言に遡る必要がある。「最初から小説を書くことを拒否してない」賢治は「小説というジャンルが近代日本社会における位置との関係」で、小説を書ける契機がなく、彼は童話執筆だけにこだわってしまったのではないのでしょうか。だが、しかしながら、自分自身なりの童話作に励んだ賢治は、小説と間違えられる程の、独特の童話式を作ったのであろう。これは、賢治自身が「少年小説」と命名した「長編童話」には著しいと思う。

Ⅱ. 宮沢賢治の童話の特質

それでは、果たして、宮沢賢治の「童話」の特質は何であろうか。本稿では、先行研究を巡りながら、宮沢賢治の『イハトーヴ童話 注文の多い料理店』の「序」及びその「新刊案内」において、自身の童話について述べた発言に遡ることで、賢治童話の「特質」について考察したい。

千葉一幹⁽¹⁾によると、

童話とは、名称通り、児童に向けた話なのだから、読者層が限定されるのは、当たり前と言えれば当たり前の話だ。しかし、賢治の童話においては、読者層の限定が作品の内実と密接に結びついていた。賢治は、ジャンルにより読者層の年齢を分けていたのだが、このように、年齢により人間を分類する発想は、彼の作品の中にも表れている。(下線筆者)

明らかな通り、千葉が解釈しているのは宮沢賢治の童話なので、ここで彼が述べた「ジャンル」は、賢治の一般文学作品の種類を指す訳ではな

く、やはり宮沢賢治童話自体の分類だということだと思われる。しかも、童話の読者層の年齢や分類まで定めるのは、むしろ「内実」ならば、一作品の内容や内実等が転換すればするなりに、その作品自体の対象層も一つ以上になる可能性が登場してくるのであろう。言い換えれば、賢治の童話の読み手は必ずしも子供だけだとは限らない。又、「子供」、「成人」双方向の宮沢賢治童話作品があり得ることが覗かれよう。このことを、「どんなに馬鹿げてあても、難解でも必ず心の深部に於て萬人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である。」という賢治の主張は明らかにする。ここで、坪田譲治による疑問を取り上げたい。

「この宮澤作品の読者は誰であるかということであります。オトナなのか。子供なのか。(下線筆者)」⁽¹²⁾

筆者による解釈通り、答えは当然、双方であり、賢治作品の読者は「子供」とも言えるなら、「大人」向けの「小説」とも言えよう。やはり、「わたくしはその通り書いたままです」そして「第三者」の分類を限定せずに、「あなたのためになるところもある」と一般的に指摘した上で、「必ず心の深部に於て萬人の共通である」と主張した賢治は、ただ「子供」向けの普通の童話式の執筆にとどまらず、このごとき程度を超えた読み物が書けたと考えるまでもなく、宮沢賢治の童話は一般読者つまり「子供」にも「大人」にも共通する読み物だと言えるのであろう。

菅原弘士は「(初略) 賢治の実践は生活台に立った現実に根差した展開であり、生活教育の一端を思わせる (中略) このいまの生活に追い詰められたギリギリの立場は、モラリストとしての姿となったし、ヒューマニストとしての生き方を強要した。ここにも私たちに対する教訓がある。」⁽¹³⁾

前節の「ここにも私たちに対する教訓」とは、「私達たる大人のために

もなるもの」でなくてなんであろう。やはり、宮沢賢治の童話、特に「少年小説」を精読すれば、「子供」だけではなく、「大人」にも「共通」する、特徴的な童話式だということが覗かれるのではないであろうか。

実際に、宮沢賢治の童話の特徴付ける、欠かせないもう一つのところがあると思われる。「わたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびらうど羅紗や、寶石いりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見ました。」「この童話集の一例は質に作者の心象スケッチの一部である。」「これらの心象スケッチを世間に提供するものである。」とは賢治の言葉であるが、これらの言葉から、賢治が描いたのは、現実を反映するものではなく、彼が想像して描いたものだと窺われる。「心象」の意味は、(大辞林の語釈)《見たり聞いたりしたことが基になり、意識の中に現れてくる像や姿。イメージ。心像。自ら経験した感覚や印象によって心の中に現われてくる像。イメージをいう》(下線筆者)である。さらに、(新明解国語辞典より)《見たり聞いたりしたことが基になり、ある形を取って心の中に現われて来るもの》である。勿論、同じ体験もしくは経験ものの、人によってそれから生まれる感覚や印象が異なってくる。従って、童話とは言え、賢治の感覚による、彼だけに限られた異彩を放っている、幻想的な童話式だと言って良いだろう。

そればかりではなく、宮沢賢治のユニークな「心象」は、「経験した感覚や印象を表す像」を超越し、現実的に「経験しなかった」ことまで達する。このことは、宮沢賢治童話の表現のいわば「擬人法」からも、より確認されるのではないであろうか。実際に賢治が童話を書く際、動物、植物、自然現象等のような、人間以外の存在を人間として見做し、人間性等を付けながら個々の性格を描くことは、賢治童話の中に著しいことである。因みに、宮沢賢治の童話について、坪田譲治⁽⁴⁴⁾は次のように分析している。

終に、宮澤賢治の童話がリアリズムでないということを書いておきたいと思います。然しリアリズムでないと言つても、決して彼の童話を低く評価するものではありません。童話というものには、元來リアリズムは少ないのであります。

確かに、宮澤賢治の「心象」に基いた童話が低評価されるものではない。逆に、賢治は自身の「幻想的」な「心象」をもって、彼の童話、とりわけ「少年小説」を通じて素晴らしい「子供像」を描くことが出来たと思われる。

宮澤賢治は自身の童話集に付けた「イーハトヴ」という名前について、菅原弘士⁽¹⁵⁾は次のように述べている。

私たちが賢治童話に感ずるもの、それは郷土、別な言い方をすれば民族の息吹である。柳田国男氏の『遠野物語』にあらわれる土くさい昔噺、新しくは大牟羅良氏の『物いわぬ農民』に物語られる土に生きる老若男女の声である。賢治はこの郷土陸奥をイーハトヴと名づけ理想郷と称した。何処かの借りものではない。そこで育つ子どもたちを見つめ更に、その子どもたちを根底に捉えて書いたのである。

やはり、賢治の童話作品に於いて語られた「イーハトヴ」が「借りたもの」として読み取られるのは正しくないと思われる。ここにおいて、賢治の「序」と「新刊案内」の発言に遡る必要があるきっかけに、改めて考察しておきたい。賢治童話は「新しい、より好い世界の構成材料を提供しやうとはする」、「正しいものの種子を有る」、「美しい発芽を待つ」そして「仮面でも偽でも仮空でも窃盗でもない。」読み物だということ、すなわち「理想郷」を描こうとした賢治は、「理想化」あるいはそれに近いものを目指したことだと考えられる。言い換えれば、「賢治が、自身がつヴィジョンの全景を表現し、その理想とする生の様相を、極太の筆

で描出することができたのは、文学においてであった」とはマロリ・フロムの発言であるが、宮沢賢治は自身の童話を通し、彼の故郷の成長している子供を手がかりに、自分の独特な「心象」から生まれた、「理想的」な「子供像」を、読者に伝えようとしたのではないであろうか。⁽¹⁶⁾

結論

以上、宮沢賢治の童話執筆の出発点そしてその特質について簡単に述べてきた。これらの終末の結論は次の通りである。宮沢賢治は鈴木三重吉の『赤い鳥』の標榜語に関心を抱き、「童話」を書き始めたのであろう。又、「小説」を執筆するチャンスがなかった彼は、自分なりのユニークな童話式の執筆に励んだと考えられる。しかも、宮沢賢治の『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』の「序」と「新刊案内」から窺われる、賢治童話の特質を、以下の三点に纏められると思う。一、「一般読者に共通する童話式」、二、「幻想的な童話」、三、「理想化された子供像を提供する童話」である。

注

- (1) 宮沢清六 他編『【新】校本宮沢賢治全集』第16巻、年譜篇、筑摩書房、2001年、161頁
- (2) 童話と童謡の児童雑誌。
- (3) 松村明編『大辞林』三省堂、1988年、2020頁
- (4) 尚学図書編『国語大辞典』小学館、1981年、2028頁
- (5) 新村出編『広辞苑』第5版 岩波書店、1998年、2230頁
- (6) 松村明監修『大辞泉』小学館、1995年、2214頁
- (7) 千葉一幹『近代文学の中の賢治童話』論、人文・自然・人間科学研究 第16号、2006年、7頁
- (8) 千葉前掲書
- (9) 千葉前掲書、11頁

- (10) 森本政彦『【新】校本宮澤賢治全集』第15巻，筑魔書房，本文編，1995年，217頁
- (11) 千葉前掲書，3頁
- (12) 坪田讓治著 草野心平編『宮澤賢治研究Ⅰ』，筑摩書房，1858年，136頁
- (13) 菅原弘士『宮沢賢治の子供像』郁朋社，2004年，101頁
- (14) 坪田前掲書，135頁
- (15) 菅原前掲書，75頁
- (16) マロリ・フロム著 川端康雄訳『宮沢賢治の理想』，社晶文社，1984年，259頁

参考資料

- 宮澤賢治著「序」『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』 杜陸出版部 東京光原社，1924年
- 宮澤賢治著「新刊書御案内」『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』 杜陸出版部 東京光原社，1924年11月15日発行

主要参考文献

- 続橋達雄編『注文の多い料理店研究Ⅰ』學藝書林，1975年
- 続橋達雄編『注文の多い料理店研究Ⅱ』學藝書林，1975年
- 草野心平編『宮澤賢治研究Ⅰ』，筑摩書房，1858年
- 菅原弘士『宮沢賢治の子供像』郁朋社，2004年
- 鈴木三重吉「標榜頭語」『赤い鳥』，春陽堂，1918年
- 千葉一幹『近代文学の中の賢治童話』論，人文．自然．人間科学研究 第16号，2006年
- 中野新治『宮沢賢治．童話の読解』，翰林書房，1993年
- マロリ・フロム著 川端康雄訳『宮沢賢治の理想』，社晶文社，1984年

宮沢清六 他編『【新】校本宮澤賢治全集』第16巻，校異篇，1995年

宮沢清六 他編『【新】校本宮澤賢治全集』第16巻，年譜篇，筑摩書房，
2001年

森本政彦『【新】校本宮澤賢治全集』第15巻，筑摩書房．本文編，1995
年，217頁

【キーワード】宮沢賢治 童話 特質 『赤い鳥』

『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』 近代小説

少年小説 幻想 理想像

付録

1. 宮沢賢治が影響を受けた『赤い鳥』の一枚。

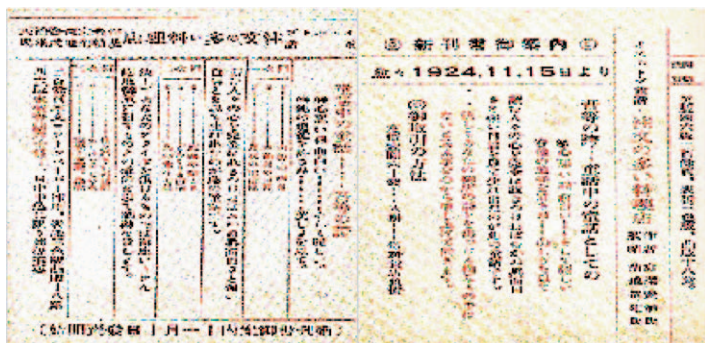


2. 宮沢賢治が生前に出版出来た唯一の「童話集」。

『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』



3. 賢治前掲書の「新刊案内」の一部。



A Research Note on The Characteristics of the Fairy Tales of Kenji Miyazawa

Amira SAID Aly Youssef

This research note will talk about the characteristics and the features of the children's stories of the literary works of Kenji Miyazawa – a Japanese famous author of children's literature.

Kenji Miyazawa started to write fairy tales in 1918. In the same year, Miekichi Suzuki published a children Magazine called “Akai Tori /Red Bird”. In the word-slogan was written by Miekichi Suzuki in this magazine, Miekichi Suzuki criticized the literary works that show the miserable life of the children. So, Miekichi Suzuki declared that his magazine is looking for a young generation of authors who write tales that show the pure and the innocent images of children.

“The fairy tales of Ihatobu The Restaurant of Many Orders” is the only collection that Kenji could publish in his life time. In the introduction of this collection –he mentions that he presents a beautiful world in his fairy tales. Also, he mentions that this lovely world is a part of his own illusion and he is going to present it to all people. So, this introduction shows how the word-slogan of “Akai Tori /Red Bird” gave effect to Kenji Miyazawa who started to write fairy tales after he read this word.

According to the introduction of “The fairy tales of Ihatobu The Restaurant of Many Orders”, Kenji Miyazawa insists that his fairy tales should be understandable to any person. So, as long as Kenji didn't specify the object in his introduction, we can say that his object here is not only children but also adults. Also, Kenji mentions more than one time that what he presents in his works are parts of his illusion. This means that we can consider the fairy tales of Kenji Miyazawa as his own mental images .after all, Kenji declares that his fairy tales don't tell any lies or false but present materials for establishing a new and lovely world. This guides us to think of the ideal world that Kenji may present in his fairy tales.

So briefly, we can determine three main features which characterize the fairy tales of Kenji Miyazawa:

1. The fairy tales of Kenji Miyazawa are Common fairy tales for all types of readers.
2. Those fairy tales are mental images of Kenji Miyazawa.
3. Those unique fairy Tales present the ideal images of children and their world.